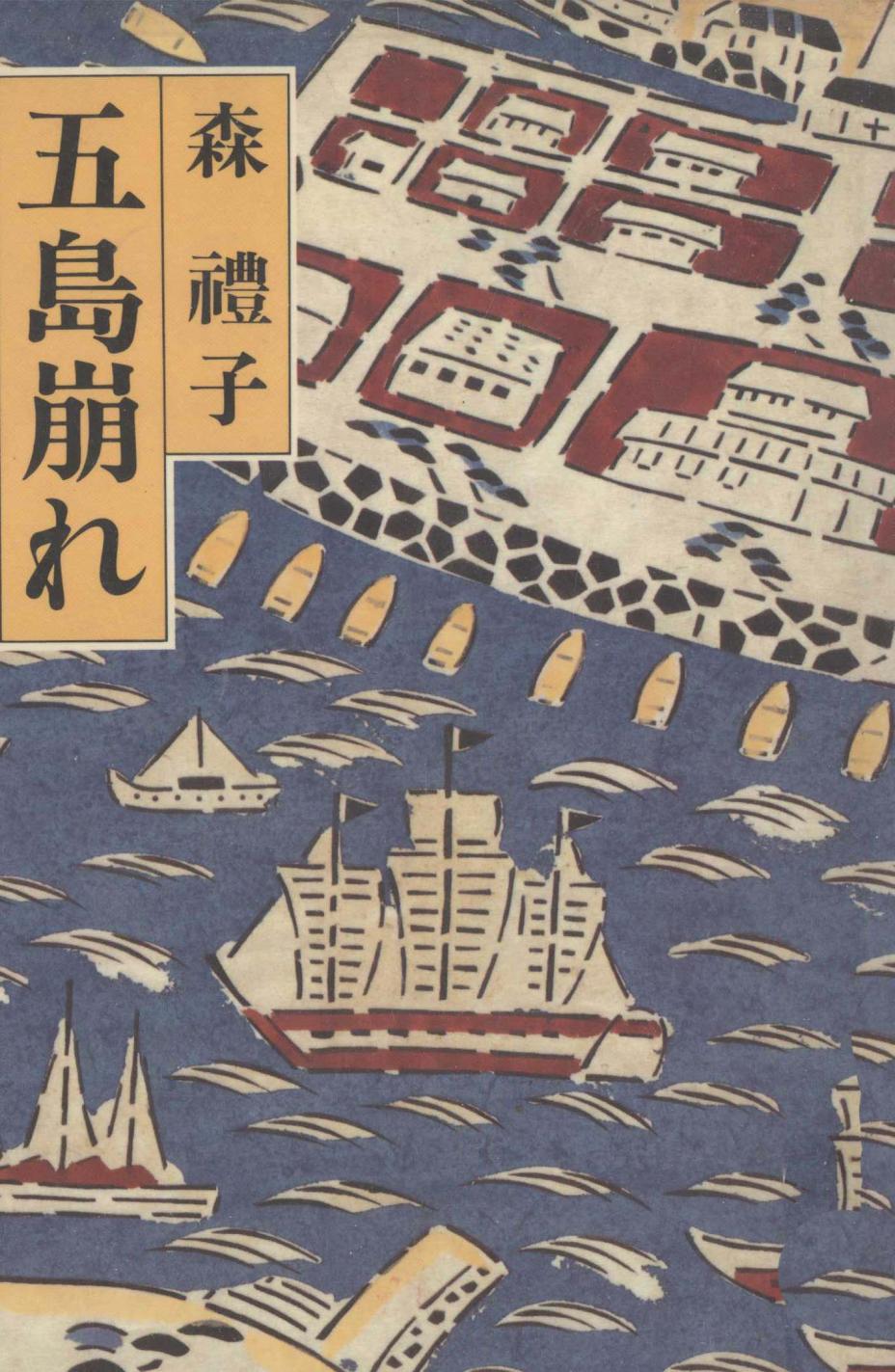


森
禮子

五島崩れ



島崩れ

禮子

主婦の友社

〈検印省略〉

五島崩れ

定価九八〇円

昭和五十五年三月二十一日 第一刷発行
昭和五十五年四月一日 第二刷発行

著者／森 禮子

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一ノ六

郵便番号 一〇一

振替 東京二一八〇番

電話 東京(03)二九四一一一一(大代表)

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷／凸版印刷株式会社

五島崩れ

装丁・挿画／渡辺禎雄

関連地図：193
ページ

I

九州とはいえ東支那海に面した五島列島の、九月末の夕方近い海風はもう冷えびえしている。

岬の崖下にある岩場の潮だまりに身を踞め、一心に蛸貝を採っていたミツは、ふと、潮騒の音が近づいているのに気づいて顔をあげた。

いつの間にか釣瓶落しの秋の陽が、遙かな沖合に濃藍色の山壁の翳をくつきり孕んだ福江島の肩にかかり、思いがけなく間近まで潮が満ちて来ている岩場を赤々と染めていた。

その岩場の何処にも、弟の姿が見えなかった。

「善太あ……善太よう……」

慌しく岩場を見廻し、夕陽のなかに白い飛沫をあげている海に目をやって、ミツはいっそう不安な表情になった。負けず嫌いで、何かに熱中すると我を忘れる癖がある弟が、蛸採りに夢中になって波に浚われたのではないかと、不意に動悸が高くなった。

満ち潮じゃし、泳ぎも出来っとじゃけん、まさか……、と打ち消したが、五島灘と東支那海

とを繋ぐ田ノ浦瀬戸に面した久賀島ひさかじまの海辺に育ったミツは、海の怖しさをよく知っていた。見た目には穏やかに風ないでいても、その下に罌やのような早瀬や深い渦を隠し、一旦引き込まれると、大人でも溺死することが珍しくない。ミツも幼い頃、泳いでいるうちに早瀬にはまったことがあったが、沖へぐんぐん流されてゆく恐怖に、助けを求める声も出なかった。幸い、近くで漁をしていた船に助けられたが、海の魔物めいた力を垣間見た思いはまざまざと心に刻まれている。

「善太よう……善太よう……」

ミツはよく透る声で、何度も弟の名を呼んだ。しかし、激しい自分の動悸の音と、夕陽に染まった岩場を次つぎに呑んでゆく波の音が聞こえるだけで、返事はなかった。

やっぱし、波に浸ひわれたとじゃろか……。ミツは顔色を失って、何事もなげに夕陽に燦きらめいている海をふたたび見やった。ひょっとすると先に家へ戻ったつかも知れん、そげんならよかが……。

思い乱れながらミツは、蟻をいつもより余計探ろうと欲を出して、弟に気をつけるのを忘れていた自分を悔いた。「人間、欲ば出すとロクなこつはなかが。父ととしゃまも新しか船ば持とうて欲ば出しんさったけ、無理の祟たたって若死ばしんさったとよ。神様デウスから与えらるるだけのもの

で暮らすとが、いっちゃんね」という、母の口癖が聞こえる気がした。

不意に背後で善太の声がした。振りむくと、岬鼻の大きな岩の上から身軽に跳び下り、岩場を上手に走り渡って来る弟の姿が見えた。

「莫迦。何処行つとったつね。おらんでん声も聞こえんごたるとけ行つてき」

乱暴な口調でミツは、近づいて来た弟を叱りつけた。

「声の聞こえたけん、戻って来つろうが」

白く粉をふいた手の甲で水漬を拭いながら善太は理屈をこね、「見んね、姉しゃま……」

「まあ、章魚じゃなかね」

遠い島蔭にほとんど沈んでしまった夕陽の名残りの光のなかに、海草で頸を括られた小さな章魚が、破れた布をひろげたような脚を伸び縮みさせていた。

「俺が捕ったつばい。岩の上ば這うとったと。ばって足の早うしてき、ようやっと捕らまえたら、岩に吸い着いて離りゃせんとき……」

「逃がしてやらんば、早う。地下人達（昔からの島人）に見つかつたら大事じゃが。うちらが磯物ば採つてよかとは、磯開きの三日後から八月の末までで、そん他は蟪とアオサしか採っちゃならんこつは知つつろうが」

「章魚は沖物で、磯物じゃなかが」

憤つとした声で善太は云い返した。珍しい獲物を姉も喜んでくれると得意になっていたの

に、逆に叱言を云われて氣を悪くしたらしかった。

「そうやねえ……磯物じゃなかかん知れんなあ……」

思案氣にミツは呟き、ばって人目にはつかんほうがよか……と、自分の手桶に入れさせた。

「さあ、帰らんば。章魚は煮てしもうてから、母しゃまに見せよう」

「うん……」

善太は頷き、蜷貝がプツプツ呟くような音をたてて動き廻っている竹箒をかかえて、勢よく浜辺の方へ歩き出した。章魚が磯物ではなく沖物だという確信はなかったが、来る日も来る日も、唐薯と蜷貝とアオサばかりの食事に飽き飽きしていたのだった。なして神様は、麦飯の鰯腹食べらるる富裕か地下者の家に俺ば生まれさせんで、貧乏か居付きの家に生まれさせたとじやろかと、ひどく不公平な氣がした。母しゃまは一言目には神様の御恵みて云いなはるばつて、正しか神様ば信じとらん人間のほうが金持ちかとは、なしてじやろうか……。

ミツと善太の姉弟は、島原の乱後、更に厳しくなったキリシタン取締りを逃れるために、長崎の外海地方から比較的取締りがゆるやかな五島列島に移住して来た隠れキリシタンの七代目の子孫で、年号が慶応と改ったその年に十六歳と十二歳になっていた。しかし、当然のことながら島の肥沃な土地や魚漁の豊かな海辺には地下の人びとが住んでいて、移住して来た隠れキ

リシタンたちが住み着いたのは山奥や岬の蔭などの痩せ地のうえ、「居付き」とか「拓き」「外道」などと蔑まれて、磯漁権や共有林の採薪権など差別をうけ、その生活は一樣に苦しかった。とくに、早く働き手の父親を失った姉弟の家は貧しく、同じ信仰の絆に結ばれている部落の人びとは漁に出ると必ず、漁れた魚の何匹かを黙って姉弟の家の台所に投げ込んでくれ、それを干物や塩漬にして野菜などとともに遠くまで母親が売り歩き、生活を支えて来たのだった。

「姉しゃま……」浜伝いに部落の方へ戻りながら、善太はふと思い出したように姉を見返って言った。「長崎から何日戻って来なはつとじゃろか、孝吉兄しゃまは」

「さあ……むこうでの都合次第じゃばって、もう出かけなはって四日になるけん、明日あたり戻って来なはつとじゃなかるかね」

「何ば土産に買うて来てくんはるじゃろか。びいどろの玉やったらよかばって……」

「莫迦。大事か用で行つとらすとぞ。土産やらあてにしちゃならんが」

「ばって、戻って来なはつたらば、姉しゃまと祝言しなはつとでしようが」
いくらか稚い嫉妬の見える声で善太は云った。

ミツは答えず、さりげなく顔を逸らして、朱と金に燃えている西の空を眺めた。福江島の真上から東支那海へ伸びている華やいだ細長い雲が、先の方を天女の羅さながらに拡げている。

「美しかなあ、空の。明日もきつと、天氣の良かが……」

天氣が良ければ明日はきつと、長崎のフランス寺へ行っている孝吉たちの一行が帰って来る……。朱と金から透明な橙色へと変ってゆく夕焼空に確かな予感を覚え、深い喜びがミツの胸に衝きあげて来た。思いがけぬ出来事で、三月前に挙げる筈だった祝言が延期になった時は、神様が少しばかり恨めしく思われたが、申し訳ないことだったと反省も覚えた。一生嫁かずに過ぎさんならん女子も珍しうなかとえ、うちんごたる何の取柄もなか娘が、頼もしうして優しか孝吉つあんと許婚の仲になつとるとじゃもん、そるだけでん果報するが……。

五島列島に移住して来た隠れキリシタンの人びとは、表向きは仏教徒や神社の氏子を装いながら、窃かに「ふる帳」、あるいは「もと帳」と呼ぶ秘密の信仰組織をつくり、部落毎に看防役（洗礼を授ける役。土地によっては授け役、水方ともいう）、帳役（祈禱文や教会暦などを伝承し、祭式を行う役）、取次役（看防役や帳役の補佐。触役ともいう）の三役を定めて、「七代経」たら、ローマのお頭さま（教皇）から遣わされたパアレが来る」という云い伝えを頼みに信仰を守りつづけ、信仰が違ふ他部落とは、縁組はもちろん、日常の交際も避ける慣習をつくりあげていた。しかし、波の荒らい五島灘と東支那海に囲まれた離島では、海難などで青年の男が奪われることが多く、未婚のまま一生過す女や若い寡婦もまた多かった。

そうした信仰の傷を隠し持っている部落で、稚い頃から仲の良い兄のように慕っていた孝吉

と許婚の仲になっていたミツは、確かに幸運な娘だった。が、いよいよ祝言を挙げる運びになっていた矢先、思いがけぬ事件が起った。

事は五島列島から遠く離れた江戸幕府の對外政策に端を発したもので、ペリーの来航によって永い鎖国の眠りが破られた幕府は、嘉永六年（一八五三）に、米、英、露の三国と和親条約を結び、つづいて安政五年（一八五八）には、米、英、露、蘭、仏の五国との間に修好通商条約を締結して、そのなかの一条で外人居留地に外人のための教会堂建設を認めた。ローマ教皇の命で日本での布教再開の機を待っていたバリ外国宣教会は、早速、数名の神父を日本へ送り、慶応と年号が改まる元治二年（一八六五）にフランス人神父プチジャンが、長崎の外人居留地の大浦に、十字架が輝く美しい三つの尖塔を持つ天主堂を建てたが、日本人に布教することは固く禁じられていた。

しかし、フランス寺と長崎の人びとが呼ぶこの天主堂が、先祖から^{ひそ}窺かに伝えられた宗旨の寺らしいという噂が浦上の隠れキリシタンの人びとの間でささやかれ、献堂式から一月後の三月十七日の昼すぎ、見物人を装って確かめに来た農婦のひとりがプチジャン神父に近づき、低い声でそっと訊ねた。

「サンタ・マリアの御像はどこ？」

二百五十年間、潜伏しつづけたキリシタン発見のきっかけとなったこの一言を、プチジャン

神父は「Santa Maria no go-zō wa doko?」と、そのまゝローマ字で日本管区長に報告している。

また同じ頃、傷治療のため長崎に滞在していた五島の中通島なかどおりじま桐ノ浦のガスバル与作という隠れキリシタンの青年も、フランス寺を見物に行つて十字架やマリア像を目にし、これこそ先祖代々待ちつづけていたローマのお頭さまのお寺に違いないと胸を躍らせた。見張りの役人の目を盗んでプチジャン神父に会い、間違いないことを確かめると、すぐ五島へ戻り、隠れキリシタンの各帳に急報した。が、中央の政治情勢さえ碌に伝わって来ない離島のこと、反応は部落によつてさまざまだった。

「どげんもこげんも、あんまり夢んごたる話じゃけんのう……」

久賀島ひさかの浜はま部べ落らくでも、看防役を勤めている孝吉の父の貞造が、赫く潮焼けした皺しわの多い顔に困惑と興奮をまじらせて、呼び集めた部落の人びとに云った。

「与作が、すらごつ（嘘）ば云うととは思えんばって、大事故こつじゃけん、万一にも間違いのあつては御先祖さまに相済まん。とにかく長崎へ行つて、しかと確かめて来つとが先じゃと、お帳役どん、取次役どんと談合して決めた。ばって、御役人衆の見張りの厳しかちうこつじゃけん、ようと潮時ば見んならん。そるまで、お授け（洗礼）やら祝い事ごうじやらは一切見合わせじゃ」

「なら、孝吉とミツさんの祝言も見合わせになつてですか。あと五日先に迫つとりますとえ……」

漱んだ水溜りのような人びとの沈黙を破って、孝吉の母のトシが、はつきりした声で夫に抗議した。信仰の教えに従つて子供の間引きをしない隠れキリシタンには子沢山が多かつたが、トシも男ばかり六人の子持ちで、信仰の勤めの多い夫に代つて働く男勝りの氣丈さと、頑丈な体格の持主だった。

「氣の毒じゃばって、仕方なかないね」

苦い顔で、取りあわぬふうに黙っている貞造に代つて、お帳役の七平が潮風に嘎れた声で答えた。もう七十近いが腕の良い船大工で、部落の船はすべて彼の手に成るものだった。

「与作の話じゃ、わしらが唱えとるオラシヨにや間違いがあつと、パアレ様が云われたそうな。日繰り（教会暦）も、悲しみの節やら降誕節（ナタラ）やらは、ようも正しうに守つて来なされたと喜びなはつたそうじゃばって、良か日悪か日は違うとるちうこつちや。障りの日が違うたまんま、大事か祝言は挙げられんけん……」

「ばって、そんならうちらは、間違うた甲斐なかお勤めば一生懸命守つて来たのですか。うんね、うちらだけじゃなか、父しゃまも母しゃまも、祖父（じい）しゃまも祖母（ばあ）しゃまも、一生、何の功德もなかお勤めばして死んなはつたのですか」

たまりかねたように強いトシの声が震えた。「あんまりですが、そりや……。そるなら、父しゃま達の魂の助かりはどげんなつとですか。ひよっとしたら、向うが違ふととじやなかですか」

「そるけん、行つて確かめんばと云うととじや。おなごが口出しすつこつちやなか」貞造は腹立たしげに、皺の奥の小さな眼を動かした。

「うんね、云いますが。おなごでん、魂の助かりは大事ですけん……」

「よかですが、母しゃま」落着いたしつかりした声で、それまで黙っていた孝吉が口を挟んだ。寡黙で、感情をあまりみせぬ彼も、めずらしく顔を上気させていた。「俺も父しゃまと長崎へ行て、ようと訊ねて来ますけん。祝言はそるからでん、遅うなか」

ならば、そぎゃんしょうたい……と、トシは頷いた。たとえオラショや日繰りが間違つていても、神様を信じる心に間違いがなければ構わないではないかと内心で思っていたが、看防役の夫に人前であまり逆つても……と思慮を廻らしたのだった。こうして孝吉とミツの祝言は延期された。

その後、浜窄の男たちはもちろん、五島各地の隠れキリシタンたちは、それぞれ数名の代表者を選び、続々と長崎へ出かけて行つた。現在でも、五島の福江島と長崎の間はフェリーで四時間あまりかかるが、小さな和船で波の荒い五島灘を漕ぎ渡るのは、海に馴れている漁夫たち

とはいえ、決して容易なことではなかった。このことだけでも五島の隠れキリシタンの人びとが、いかに魂の助かりを重大事としていたかが分るが、更に厳しいキリシタン禁制下に危険を省みず、窃かにプチジャン神父に会って教義やオラシヨの誤りを正した。慶長十八年（一六一四）の大禁教令から二百五十年もの間、厳しい迫害下に潜伏しつづけたキリシタンたちの信仰に、口伝の誤りや人間の恣意が加わり、仏教や土俗信仰などと混淆した「神寄せのオラシヨ」や「家魂入れのオラシヨ」などの呪いの祈禱が出来てしまったのも無理からぬことで、むしろ教義の大意と、「天に在す」（主禱文）、「ガラサ」（アベ・マリア）や洗礼を授ける時のラテン語の祈りなどが、かなり正確に伝えられていたことは驚くべきことと云ってよかった。ローマ教皇はこのことを、「奇蹟」として日本信徒に宛てた慰問文で讃えている。

孝吉も、父の貞造や七平などと何度か長崎へ行つてプチジャン神父に教えを受けたが、若いだけに悟りが早く、帰つて来るたびに、生々した表情でミツに話を伝えた。

「フランス寺のマリア様の御像は、ほんに氣高うして、みじよかが。嫁取りやらせんで、一生仕えとうなるなあ……」

と、わざと揶揄うこともあったが、

「パアデレ様から伺うたときゃばって、俺たちの部落のお水授けのオラシヨは、エゴちう言葉が抜けとるそうじゃ。エゴちうとはラテン語で、我ちう意味じゃそうばって、ほんなこつ、エ

「うちもんがなけりゃ、信心もなか道理たいね……」

などと、ミツには難しくて理解出来ない話が多かった。しかし、これまで見たこともないほど生々した様子で話す孝吉を見るのは嬉しく、男というのはなぜ、これほど難しい理屈が好きなのだろうと、不思議な思いも覚えた。

「姉しゃま、庄屋さまじゃが」

突然、不安げな善太の声がした。川口の浅瀬を涉りながら孝吉への思いに心を奪られていたミツは、はっとして顔をあげた。

「ほう。蟻採りかいね」

何気なく足を止めたふうに向う岸に佇んでいた野村喜左衛門は、深く頭を下げたミツと善太を白髪まじりの眉の下の表情のはっきりしない目で眺め、愛想良く声をかけた。

ミツは黙ったまま、いっそう深く頭を下げた。喜左衛門は浜窄部落からの帰りの途中らしかったが、島では代官に次ぐ身分の庄屋が、村から遠くはずれているうえに、犬畜生と等しく見做されている居付きの部落に足を運ぶなどということは、かつてない出来事だった。ばって、後めたかごたるふうばしちゃんらん……と、突嗟にミツは思案した。

「長崎から何日戻って来っとかいね、孝吉は」

「……うんね。平戸ん方へ漁に行とるとです……」